

二八二頁）それは自らの六年間にわたる「日本軍性奴隷」の国連運動の成果が証明している、と豪語する。そして、最低五年は国連人権活動を継続しなければ成果はあがらないという。

戸塚は、確かに六年間で人脈をつくり、情報を絶えず流し、ロビー活動を行い、世界にNGOとネットワークをつくって、「慰安婦」を「性奴隷」にでっち上げることに成功した。それも、ほとんど一人の力によってである。その有能さは日本を性犯罪国家に仕立て上げるために十分に発揮され、本人も驚くほどの広がりをもたらした。昭和戦前期に活躍したコミンテルンのスパイ・ゾルゲにも匹敵する反日活動の「業績」である。

我々もまた、逆の立場で、戸塚の教訓を生かして取り組まなければならないと考える次第である。

第一章

そもそも、国連とは何だったのか



ジュネーブ国連欧州本部。

国連幻想はなぜ生まれ、 どこが間違っているのか

加瀬 英明
か せ ひで あ き



世界のなかで、滑稽なことに日本ほど、国連に対する憧れが強い国はない。それなのに、日本人は国連について、よく知らない。

国連は「平和の殿堂」として、多くの日本国民にとつて「平和憲法」と並んで、信仰の対象となってきた。

そのかたわら、歴代の政府が「国連中心主義」を、日本の外交の基本方針とすることを、表明してきた。

何よりも、まず「国連」という名の国際機構は、困ったことに世界中どこを捜してみても、どこにも存在していない。

「国際連合」も、「国連」も、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」の誤訳である。国連は、日本人の頭のなかだけに、存在しているのだ。

もともと、日本では「国際連合」とか、「国連」という呼称が、すっかり定着してしまっているから、ここでは便宜のために「国連」という呼称を、用いることにしたい。

国連は、その公用語の一つである英語では、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」と呼ばれている。「チャーター・オブ・ジ・ユナイテッド・ネーションズ」である国連憲章は、日本がまだ連合国を相手にして、第二次大戦を戦っていた昭和二十（一九四五）年六月に、日本と戦っていた五十一ヶ国によって、サンフランシスコにおいて調印された。

国連憲章は、今日でも外務省による正訳となっている翻訳では、「われら連合国の人民は……」という言葉から始まっている。原文は、「ウィー・ザ・ピープルズ・オブ・ジ・ユナイテッド・ネーションズ……」だ。

ここでは、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」が、「連合国」と正しく訳されている。

そして、「われらの一生のうち二度まで言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救い……」という文言が、続いている。

ところが、文中で「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」が、「連合国」と訳されているのに、「ザ・チャーター・オブ・ジ・ユナイテッド・ネーションズ」のほうは、なぜか、「国際連合憲章」と

訳されている。翻訳に当たって、当然のことに同じ言葉は、同じように訳さなければならないのが、鉄則であるのに、何とも奇妙なことだ。

ニューヨークのマンハッタンのイースト川に面して、三十九階建てのガラス張りの本部がたっている「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」の正しい名称は、「連合国」なのだ。

国連が誕生した時から、五つの公用語の一つとして定められてきた中国語では、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」は、「連合国」である。

それだったら、日本語でも、「連合国」と呼ぶべきだ。日本は中国と同じ漢字圏に、属している。韓国と北朝鮮においても、国連を指す言葉として「連合国」を使用している。

「連合国」は、日本語でも先の大戦中から常用され、十分に馴染んできた言葉である。「連合国」という正しい名称を、そのまま用いるべきである。

日本と同じ敗戦国であるドイツでは、ドイツ語で第二次大戦前に存在した、かつての国際連盟が、「ディ・フルカーブンド」であるのに対して、国際連合はドイツが戦った相手の連合国と変わらない、「ディ・フェアインテ・ナツイオネン」（連合国）と、正しく呼ばれている。

イタリア語でも、「レ・ナツイオニ・ウニテ」であって、「連合国」である。

「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」という呼称が、連合国を指す言葉として、初めて採用されたのは、日本が真珠湾を攻撃して、対米戦争が始まった翌月の昭和十七（一九四二）年一月

一日のことだった。

この日、日本、ドイツ、イタリアなどの枢軸諸国と戦っていた二十六ヶ国の代表が、ワシントンに集まって「連合国宣言」を発した。

この名称は、このワシントン会議で演説した、フランクリン・D・ルーズベルト大統領が主唱した。

ルーズベルトが、このワシントン会議において演説し、日本や、ドイツと戦っている同盟諸国を、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」と呼ぼうと、提案したことによった。

したがって、日本は昭和十六（一九四二）年十二月から三年八ヶ月にわたって、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」、または連合国を敵として、戦ったのだった。

東京をはじめとする日本の都市に、国際法



ニューヨークの国連本部。

を踏み躪って、絨毯爆撃を加え、広島、長崎に原子爆弾を投下して、無辜の住民を大量に虐殺したのも、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」——連合国の空軍だった。

あるいは、今日、日本ですっかり定着してしまっている「国際連合」という言葉を用いるならば、国連の空軍が日本の都市に、非人道的きわまる爆撃を、加えたのだった。

「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」は、第二次大戦を戦った、一方の軍事同盟の呼び名である。国連が結成された時に、日本と戦っていることが、加盟資格とされた。国連は生まれからして、平和の国際機構ではなかったのだ。

国連への加盟資格については、国連憲章第四条によって、「すべての平和愛好国」と規定されたが、国連が発足するのに当たって、「平和を愛好する国」の条件として、一九四五（昭和二十）年三月一日までに、日本、ドイツをはじめとする枢軸国に対して宣戦布告していることが求められた。

そのために、いくつもの国が国連に加盟するのに必要な、「平和を愛好する国」として資格を与えるために、日本とドイツに慌てて宣戦布告した。

国連憲章——正しくは「連合国憲章」は、加盟資格として「平和を愛好する国」であることを定めているが、いったい、中国や、ロシアが平和を愛する国であろうか？

北朝鮮も、今日、アメリカや、ヨーロッパ諸国によって「平和の敵」として烙印を押されて

いるアサド政権のシリアも、国連加盟国である。

この疑問は、日本に宣戦布告をしていた国が、「平和を愛好する国」の要件であったことによつて、氷解しよう。国連は、「平和を愛好する国」の組織ではないのだ。

日本でも「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」は、昭和二十（一九四五）年十一月までは、正しく「聯合國」と訳されていた。聯は連の旧字である。

この年の四月に五十ヶ国の連合国の代表が、国連憲章——正しくは連合国憲章——を起草するために、サンフランシスコに参集した。

この時、日本の外務省は当然のことに「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」を、「聯合國」と訳した。昭和二十年四月二十五日付の朝日新聞をみると、「桑港（注・サンフランシスコ）會談 けふ開く、群小國驅り集めて四十六ヶ國 筋書どほり果して踊るか」という見出しがあつて、「國際機構審議聯合會議と彼等が銘打つ桑港會議は……」と、記事が始まっている。

その後も、「ジ・ユナイテッド・ネーションズ」は、「聯合國」と訳されている。

八月九日付の朝日新聞は、「聯合國安全保障中間委員會」という見出しのもとで、「ロンドン特電」桑港會議において設置を決定された聯合國安全保障機構の中間委員會は恒久的國際機構設置準備のため来る九日ロンドンで第一回の會合を行ふことになつた……」と、報じている。

十一月六日付の朝日新聞には、「世界共通の教科書 聯合國文化會議で提案」という、見出し

がある。記事は「聯合國教育文化機構の第一次會議は」と、始まっている。ユネスコ（UNESCO・国連教育科学文化機関）のことだ。

ところが、十一月二十七日付の紙面から、なぜなのか、「聯合國」が「國際聯合」とも訳されるようになっていた。「國際聯合總會は一月」という見出しで、「（ロンドン二十五日発UP）共同」聯合國準備委員會は二十六日、小國代表中から委員長を選挙する予定を発表した。なほ國際聯合第一回總會を明年一月開くやう準備をすすめてゐる」と報じている。

短い記事であるのに、何とも奇妙なことに、原文は「ユナイテッド・ネーションズ」であるのに、「聯合國準備委員會」と「國際聯合第一回總會」と、異なつて訳している。

「連合国」が「國際連合」にすり替わつたのは、外務省が「聯合國」と訳すると、刺激的であるために、戦前あつた「國際聯盟」をもじつて、「國際聯合」と呼び替えたのだつた。

敗戦後、敗戦を「終戦」にすり替え、占領軍に対して敵意をいだかないように、「占領軍」を「進駐軍」といい替えて呼んだのと、同じことだつた。

もつとも、日本民族はいまでも宴会が終わる時には、^{げん}験を担いで、「お開き」というし、戦時中は軍が「退却」を、「転進」といい替えたものだつた。

明治に入るまでは、四つ足を口にしてはならなかつたから、猪を「山鯨」と呼び、兎は一羽、二羽といつて、数えられた。このような例は、多い。

戦後、軍を「自衛隊」と呼んでいるのも、同じことだ。日本人は都合の悪いことを、言葉をすり替えることによって、自分を騙すことに長けているが、^{にせもの}贋物を本物だ取り違えてしまうと、物ごとによつては、大怪我をすることになる。

「連合軍」を「國際連合」と呼び替えたために、日本国民の眼から、国連の本質が今日に至るまで、隠されてしまつた。国連は、「戦勝国のクラブ」なのだ。

そこで、国連憲章には、日本などの旧枢軸同盟諸国を対象とした、「敵国条項」がある。国連のどの原加盟国も、日本をはじめとする旧敵国が、不穏な動きをみせたと判断した場合には、国連に諮ることなく、いつでも自由に軍事攻撃を加えてよいというものだ。

日本では国連に対して、宗教的などいえる信仰心をいだいている者が、多い。

しかし、もし、国連を「連合国」と正しく訳してきたとすれば、戦後の日本においてまさか、国連信仰がひろまることが、なかつたに違いない。

一九七五（昭和五十）年に、多額の国税を投じて、東京に国連大学を招致して開設されたが、もし、正しく「連合国大学」と呼ばれていたとしたら、いったい、誘致したものだろうか。

日本国憲法は、戦後、日本で一貫して「平和憲法」と呼ばれて、親しまれてきた。

しかし、アメリカが日本を占領下に置いたもつとで、日本に強要した日本国憲法は、日本に永久に軍備を持つことを禁じることによって、アメリカにとって日本が再び脅威となることがな

く、日本を永久にアメリカの属国とすることをはかったものだった。憲法の姿を装った、不平等条約だった。日本国民が「平和憲法」として親しんでいるものの、事実上「アメリカを守る憲法」なのだ。

国連は平和の守護者として、頼ることができるのだろうか？

国連の唯一つの最高の意思決定機関である安全保障理事会は、拒否権を持つ五つの常任理事国によって構成され、牛耳られている。国連が生れた当初から、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、中国の五つの国が、常任理事国となっている。

国連は、建てられてから七十年にわたって、一度も修理することがなかった廃屋に、よく似ている。国連は世界の現実には、まったくそぐわなくなっている。この意味でも、日本国憲法によく似ている。

プーチン大統領のロシアが、二〇一四年にウクライナから、傍若無人に国際法を蹂躪して、クリミア地方を奪い取ったが、国連はこのウクライナ危機に当たって、何の役にも立たなかった。国連は、まったく無力だった。

国連は麻痺したように、動くことができなかったが、ロシアが安保理事会で拒否権を持っているからである。

日本では「国連中心主義」という言葉が、長いあいだ、国是として罷り通ってきたが、「中心

がないものを、中心とする主義」だった。

国連は最高意志決定機関である、安全保障理事会を構成している、常任理事国である、ロシア、中国を含めた五ヶ国の意志が、一致しないかぎり、まったく動くことができない。だから、中心を欠いている組織である。

国連の歴史を、少しでも知っている者なら、五つの常任理事国の意志が一致することが、めったにないことを、よく承知しているはずだ。

日本が、万一、中国の侵略を蒙った場合には、国連は動くことができない。中国が安保理事会の常任理事国であって、かならず拒否権を行使するからだ。

これまで、日本は国連が中心を欠いており、五つの常任理事国によって牛耳られているという現実には、目を向けることなく、日本外交の中心として頼りにしようという、甘いというよりも、愚かしい幻想に耽_{ふけ}ってきた。

中国が武力を用いて尖閣諸島を奪いにきた場合に、国連に頼_{すが}ろうとしても、無駄である。

国連は万一の場合に、頼りにならない。「諸国民の公正と信義に信頼」(日本国憲法前文)して、日本の安全を保つことはできないのと、同じことだ。

戦後の日本国民の平和願望は、祈りであるが、平和は努力して創りだすものであって、祈りや、呪(まじな)呪いによって、もたらされない。

戦後の日本国民は、「憲法幻想」と、「国連信仰」によって、自ら進んで目を目隠しによって覆ってきた。

日本において、国連は「平和の殿堂」と呼ばれてきた。

だが、世界のなかで滑稽なことに、そのように崇めて、国連を信仰の対象として拝んできた国は、日本の他に存在していない。

他の国はすべて、国連を外交の道具の一つであるか、国際的な闘争の場としてみなしている。

「国際連合」という誤訳も、「戦後レジーム」を、支えてきた。

しかし、日本政府と国民が、「国際連合」がまったくの誤訳であることを認めて、「連合国」という正しい名称を用いる決断が、できるものだろうか？ そうするべきであるが、そのようなことは、とうてい望むことができない。

今日、国連の加盟国は百九十三ヶ国を数える。国連職員がそれぞれの加盟国ごとに、人数を割りふられており、雑多な人々によって構成されている。

第三世界の加盟国から拠出された職員のなかには、これらの国の政権幹部や、政権を支えている有力者や、取り巻きの縁者が多い。

職員のポストは、本国における所得を大きく上回る高給を目当てにして、利得とみなされている。

そのために、能力や、人格が疑わしい者が多く、国連を食い物としている。

第三世界の貧しい加盟国の大多数において、専制政治が行われているか、民主主義が未熟であるために、役人の不正蓄財がさかに行われ、収賄が蔓延している。

国連本部や、下部機関は多分に、第三世界のこのような現実の延長となっている。

国連本部や、その下にあるさまざまな機関において、資格をまったく欠いている者が働いており、不正があとを絶たないことが、しばしば問題となってきた。

国連の下部機関によって、奇矯としかいえない報告書が発表されることが、少なくない。

とくに、人権を扱う委員会の構成国として、国内で人権を踏み躪っている諸国が多く加わっており、発言権を行使しているのは、国連の権威を疑わせるものであって、国連のおぞましさを示している。

国連は、真つ当な国際機関ではない。

それでも、国連は全世界の国々の代表が、一堂に集っている唯一つの公的な場である。

そのために、国連の質がどうあれ、加盟国にとって、重要な外交の道具となっている。

日本としては、国連において日本の主張を、堂々と積極的に言い、世界に日本の立場を知らせる場として、活用してゆかねばならない。

国連とは、 壮大な無駄と腐敗の体系だ

藤井 厳喜



日本人の国連幻想と国連信仰は最早、滑稽を通り過ぎて悲惨ですらある。国連が第二次大戦の連合国（戦勝国）が中心に造った国際組織であり、日本などの敗戦国にとつては極めて不公平で不利な仕組みをもっている事については、既に加瀬英明先生が本書に優れた論文を寄稿されているので筆者は違った観点からの国連批判を試みてみたい。

かつて自民党の某政治家が国連を「田舎の農協のようなもの」と批評してマスコミから袋叩きにあったことがある。しかしこんな発言は日本の田舎の農協に対して誠に失礼である。農協は実質的な機能をもっているし、その職員は善良であり、国連程の無駄遣いはしていない。国連というのは殆ど何のポジティブなアウトプットもなく、ただ巨大な予算だけを浪費する機

関である。

国連を意味する「UN」という英語の略称をみると、筆者が強烈に思い出す事がある。それはカンボジアのことだ。カンボジアの停戦協定が結ばれ、国連のPKO活動が開始された。その時、筆者は2年連続してカンボジアPKO活動の現場取材した。その時の話であるが、夕刻になると豆電球で飾られた買春街に青い「UN」の旗をなびかせた白いトヨタの四輪駆動車がずらりと並んでいた。各国から集まったPKO要員達は、車体に大きく「UN」と書かれた四輪駆動車で、国連の旗までなびかせながら売春宿に押し寄せていたのである。第三世界から来た兵士達にしてみれば、この国連PKO活動では大変な高給をもらっており、どこに行っても彼らは陽気であった。筆者は終戦直後の日本の占領軍の兵士達もこんな調子ではなかったかと、ふと想像力を巡らせていた。

さて、箇条書き的に国連の批判を述べてみたい。

- (1) 国連は膨大な予算を浪費する国際機関である。そこはある意味「無駄遣い天国」だ。我々が税金から拠出する分担金は国際高級官僚という寄生虫階級に浪費されている。
- (2) 国連は国際紛争の解決に何の役にも立っていない。時には明らかに人道主義に反する役割を果たす事もある。国連はよく見ても無駄なおしゃべりのフォーラムに過ぎない。
- (3) 国連は、北朝鮮のような人権や人道を無視するテロ支援国家がそのプロパガンダを行なう

場となってきた。日本ばかりではない。アメリカやイスラエル等も度々、国連関係機関の攻撃と批判の対象になっている。

■国連をどう利用するか？

国連は好意的に見ても国益を追求する国家間の喧嘩の場所の1つに過ぎない。見方を変えれば謀略の場でもある。「国連中心外交」というのは、日本では未だに受けのいい言葉のようだが、何の意味もないどころか、寧ろ日本の国益を傷つける危険な発想である。日本に必要なのは、第1に国連において戦う姿勢と第2に脱国連外交の強化なのである。

一体、「国連中心外交」という言葉は何を意味しているのだろうか？

よく考えると全く意味不明である。例えば今日の日本の政治家が「国会中心に政治を進めます。我が党の方針は国会中心主義です」と言ったら誰もが大笑いをするだろう。政治の中心が国会なのは分かりきった事で、その国会でどのような政策を掲げ、どのような主張をするのが、それぞれの政党の役割なのである。国会は駆け引きと合意形成の場に過ぎない。

しかも日本の現体制では、国会は国権の最高機関と位置づけられているから、国会という場を政治の中心とする事には何の問題もない。そんな事は常識なので、「国会中心政治」などとい

う事は誰も主張しないのである。

国連中心主義というのも愚かな発想で、国連で何を主張するのか、国連でどのような日本の国益を主張するのかが大事なのである。国連は国益を追求する外交の場の1つに過ぎない。しかも、国会は世界の外交の中心ではない。国会は国権の最高機関であるが、国連は世界政治の最高機関ではないのだ。いくつも存在する国際機関の1つに過ぎない。

現在まで日本は膨大な資金を国連に提供してきたが、およそ国連が日本の為に役に立ってくれた事は極めて稀である。単に無駄遣いというばかりでなく、慰安婦問題や拉致問題の事を考えれば、国連と国連関連機関は日本を軽視し、更に日本の国益と尊厳を傷つけるような事を平気で行なってきた。国連とそれに関係した諸機関は、日本の味方であるよりは、日本の敵であった事が多いのである。

■アメリカの愛国者は国連が大嫌い

1970年代後半から80年代前半にアメリカに留学した筆者にとって、印象的だったのは、アメリカの愛国者が国連に著しい嫌悪感を抱いていた事である。そもそも国連という組織が構想された時に、共産主義にシンパシーを感じていた米大統領フランクリン・ルーズベルトは今

「曰えば異常と思える程の妥協をソ連のスターリンにしてしまった。スターリンはルーズベルトに対して「ソ連は15の共和国の連邦であるから、15の共和国は別々に国連に加盟する。ソ連には国連で15票を与えろ」と主張したのである。アメリカ合衆国は1票だが、ソ連は15票欲しいという主張だ。流石のルーズベルトも驚いて、この案には同意しなかったが、スターリンに妥協してロシア共和国の他にベラルーシとウクライナは別の国家として国連に議席を与えろという妥協をしてしまった。つまりソ連は1国だが国連総会で3票を獲得するという約束を勝ち取ったのである。

日本には国際政治に関する陳腐な謀略論を振り回す輩が少なからずいる。彼らの一派にこんな主張がある。「国連はアメリカが造ったもので、全てアメリカの謀略によって動いている」という国連陰謀論がそれだ。ところが、アメリカの保守派、愛国者は国連を嫌悪している。これは国連が、ソ連をはじめとする共産主義勢力が大きな力を揮う場所になってしまった、という事に由来している。ソ連は発展途上国の間に多くの友好国を創り上げ、彼らをまとめて反米の方向に誘導していった。国連が反米活動の場になってしまったので、アメリカとしては極めて居心地の悪い事になってしまった。特にベトナム戦争を通じて、アメリカは国連の場で多くの批難を受ける事になり、国連はアメリカにとって、極めて危険な場所になっていった。当時のアメリカの国連大使ダニエル・パトリック・モイニハンが書いた回顧録のタイトルは『危険

な場所 (A dangerous place)』であった。当時の国連の雰囲気がよく表れている。アメリカの愛国者の中には、「国連本部をアメリカから追放しろ」と唱える者までいた。国連本部のビルが建っている土地は、国連創設時にアメリカが国連に寄付したもので、他国の大使館のようにアメリカの主権が及ぶところではない。アメリカの国益に反する国連が米本土に治外法権の土地をもっている、という事自体が気に食わないというのが保守派の主張であった。それほどにアメリカの保守派の間では国連の評価は低かったのである。

1984年、レーガン政権の時にアメリカはユネスコを脱退した。この時の経緯をみると、国連関連団体なるものは如何に膨大な予算を無駄遣いしているかだけでなく、国際高級官僚という寄生虫の巣窟となっているかがよく分かる。ユネスコは国連専門機関と呼ばれているものの1つである。国際労働機関 (ILO)、世界保健機関 (WHO) などと並ぶ国連専門機関であり、これらの機関は国連経済社会理事会の傘下にある。国連の名を冠してはいるがユネスコのような専門機関は、国連本体とは別の官僚組織であり、予算も別である。ただ国連経済社会理事会が国連本体と専門機関との橋渡し役となっている。

事の発端は1974年にアマドウ・マハタル・ムボーというセネガル人がユネスコの事務局長に選ばれた事に始まる。ムボー氏は独特の押しの強さを発揮して、ユネスコを私物化し、牛耳ってゆく。6年の任期を終えたムボー氏は80年には再選されている。2期目に入るとムボー

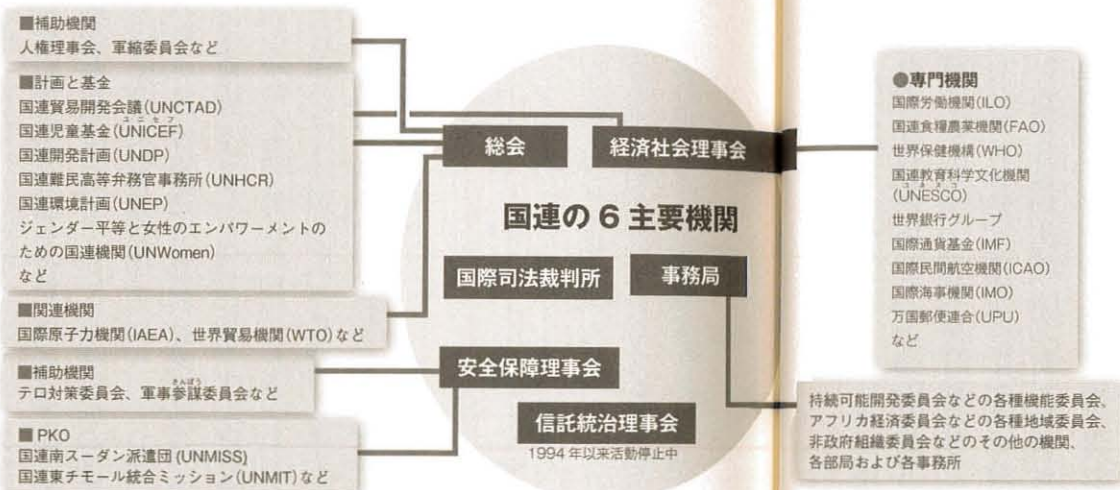
アメリカがユネスコに復帰したのは、2003年になってからで、ブッシュ・ジュニア政権での事であった。実はこういった腐敗や無駄遣いは国連本体は元より、国連関連の専門機関すべてで行なわれていると見る事が出来る。

とにかく国連のやっている事は無駄遣いのオンパレードである。天文学的量の印刷物が発行されるが、殆ど誰もがそれを利用しない。

滑稽な実例を1つあげよう。国連経済社会理事会のジュネーブに本拠を置く欧州経済委員会は、1992年に『タマゴ基準』と題された24ページの英文パンフレットを3000部、発行した。これは新鮮な卵、割れた卵、等々、多

事務局長は欧米先進国、特にアメリカを露骨に敵視するようになっていった。彼の組織運営の仕方は極めて独裁的であり、事務局員の採用に関しても縁故者の採用を優先させた。経理にも介入し、ユネスコの資金を利用してパリの高級アパートでの奢侈な生活にふけていた。ムボー氏の反米的な言動とその組織の私物化に、時のアメリカのレーガン政権は鋭く攻撃を加えた。アメリカの会計検査院はユネスコの経理の監査に乗り出した。ところがその直前、パリ市内のユネスコ本部ビルで放火事件が起き、重要な書類の一部が焼失してしまった！それでもアメリカは監査を行なったが、それによればユネスコには使途不明金が少なくとも1400万ドルある事が明らかになった。会計報告も全くのデタラメであった。3300人の全職員の内、パリ在住者が7割も占めている事も問題になった。レーガン政権は、ムボー氏が反米的言動や腐敗を正さなければユネスコを脱退すると表明した。そしてレーガン大統領が2期目の当選を決めた1984年末にアメリカはユネスコを脱退した。シンガポールとイギリスもアメリカに続いて脱退している。

国際連合の主な組織 (2012年、国連広報センター資料による)



様な卵を美しいカラー写真で印刷した刊行物である。当時のアメリカのピッカリング国連大使は流石にこの刊行物にショックを受け、ジュネーブの経済社会理事会に抗議を行なっている。このような無駄は国連やその関連専門機関では日常茶飯事である。このような刊行物の印刷の背後で、どのような不正や腐敗が行なわれているかは、容易に想像できる。

国連専門機関は、国連という名を冠してはいるが、実体上は国連とは別の組織である。国連本体は元より、こういった専門機関に対しても、日本は膨大な額の分担金を負担しているが、その資金がムボー氏のような人物の高価なシャンパン代や不急の印刷物に浪費されていくのである。

■ チベットへのチャイナの侵略を防げなかった国連

現在、チャイナがチベット人やウイグル人に対して行なっている非人道的な弾圧、虐殺については、国連は全くなすすべがない。それはチャイナが国連の中心である安全保障理事会の常任理事国であり、拒否権をもっているからだ。しかし、中華人民共和国が国連メンバーとなり、国連安保理の常任理事国となる以前の段階でも、国連はこの国のチベット侵略を防ぐ事ができなかったのである。

話は1950年にさかのぼる。この年の10月、中国共産党の4万の軍隊が東チベットに侵攻した。この攻撃に対し、当時独立国であったチベットの国軍兵士と義勇兵8000人は果敢に抵抗したが、圧倒的な中共軍の兵力に敗北。この戦闘でチベット人兵士の半数、約4000人が殺害されている。この時、チベット政府は既に誕生していた国連に救いを求めた。しかしこの時、インド代表は驚くべき発言をした。それは「この問題を国連総会の場で討議するのは相応しくない」という発言である。その理由はチベット、チャイナ、インド3ヶ国に平和をもたらす為には、国連の場は相応しくないという理由である。この時、イギリスの代表までもインドの提案を支持した。この為、救いを求めるチベットの声は、国連の場で終に取り上げられることもなく、黙殺されたのである。国連はチャイナのチベット侵略について討議する事すらしなかったのである。

当時、インド、イギリス、チベットの3国は条約を結んでおり、この条約は3ヶ国間で効力を有していた。つまりインドとイギリス両国はチベットを独立国として承認していたのである。しかし国連はチベットを救えなかったのだ。600万人のチベット国民は終に中国共産党の侵略の犠牲者となってしまった。国連が如何に無力な存在であるかが、この一事からしても明瞭である。しかもこの時、中国共産党政権は、国連に議席すら持っていなかったのである。それにも関わらず、このような有様であった。まして現在のように、中共政府が国連安全保障理事

「会」の常任理事国となった状況においては、この国の尖閣列島に対する侵略などを国連の場で防ぐ事は不可能なのである。

当時のチベットは紛れもなく独立国であった。第二次世界大戦中、米ルーズベルト政権は蒋介石政権への武器供与の為に、インドからチベットを経由して重慶へ到る道路建設の許可をチベット政府に要請していた。チベット政府は第二次大戦における中立を貫くという政策をとっており、このアメリカからの要請を拒否している。実はチベット国内では、日本の勝利を祈る仏教祈祷が行なわれていたとも言われており、チベットは親日的な態度を保持した中立国であった。こういった外交的経緯からしても、アメリカも又、チベットを独立国として認識していた事がよくわかる。

1946年には、チベット政府は联合国諸国に使節団を送り、1947年にはインドで開催されたアジア諸国会議にも代表団を送り込んだ。又、インドの独立を契機に、チベット政府は英米インド、チャイナ各国に通商代表団を派遣している。この時の通商代表団はチベット政府発行のパスポートをもって各国に入国した。つまり、これらの国々はチベットが独立国である事を事実として認めていたのである。しかし、チベットの悲劇は起きてしまったのだ。

■日本を疎外する片寄った国連

国連やその傘下の専門機関が日本を如何に疎外してきたかは、実例を挙げればきりが無い。国連人権理事会やその前進である国連人権委員会における慰安婦問題の扱いの愚劣さと極端な反日ぶりについては、実際に人権委員会に乗り込んだ皆さんの報告に詳しいので割愛させて頂き、他の分かり易い簡単な事例を挙げておこう。

1998年8月、北朝鮮はテポドン・ミサイルを発射し、これは日本列島の上を通過して太平洋上に着水した。日本はすぐさま国連安全保障理事会に働きかけ、北朝鮮非難の決議を出そうと働きかけた。当時、日本は安保理の非常任理事国であった。だが、チャイナがこれに抵抗し、非難決議の採択はできなかった。それどころか非難決議の提出すらできなかったのである。

2003年4月、日本は北朝鮮の日本人拉致問題を含む同国の人権弾圧への非難決議を採択しようとする国連人権委員会でも各国に働きかけた。しかし、当時の国連人権委員会加盟53ヶ国の内、チャイナなど10ヶ国が反対し、インドなど14ヶ国も棄権した。

2014年12月18日、北朝鮮の人権侵害を批難する決議は国連総会で賛成116ヶ国、反対20、棄権53で可決した。北朝鮮への同種の決議は10年連続で可決されている。しかし何の拘束力もないため、日本の拉致問題の解決などには全く力を発揮していない。拉致問題のような明々

白々な反人道的テロですら、その解決に国連は全く無力なのである。

ちなみに日本は、国連通常予算の10%以上を毎年負担してきている。2012年は米国の分担率は22%、日本の分担率は12.5%である。2013年は米国の分担率は22%、日本は11%である。2013年の米国の支出額は1ドル1100円と換算して618億5000万円であり、日本の支出額は約276億円である。これに対してチャイナは安保理常任理事国でありながら、2013年の分担率は5.1%、僅か131億円しか負担していない。

日本が国連関連で膨大な無駄遣いをさせられている機関に「国連大学」があるが、これについては稿を改めて論じたい。

ちなみに、国連人権理事会によく槍玉にあげられるイスラエルのネタニヤフ首相は、最近「人権理事会はテロリスト理事会だ」と憤慨していた。誠にもっともな怒りである。慰安婦問題で人権理事会に苛められている日本人にはこの怒りはよく分かるはずだ。

■ 潘基文が潰してくれた国連幻想

国連の内側でも外側でも、潘基文（パン・ギムン）事務総長の評判は非常に悪い。まして韓国の国論に連動して反日的な言動が顕著である。本来、国連事務総長は出身国からも中立的で

なければならぬはずだが、この人には恥も外聞もないらしく、現在の韓国の反日がそのまま彼の言動には反映されている。国連の1割以上の予算を分担している日本としては、事務総長に堂々たる抗議をしなければならないが、どうも日本外務省にはそんな度胸もないようだ。この際、国連分担金の大幅減額も考えてみるべき時である。

しかし、潘基文事務総長は、大いに日本の役に立ってくれているのかもしれない。それは同氏の反日的言動が、日本人の間に蔓延していた国連幻想や国連信仰を破壊する効果があったからだ。日本の国連大使を1998年から2002年まで4年間務めた佐藤行雄氏は一部の日本人が未だに主張しているところの「国連中心主義」を次のように鋭く批判している。「国連中心主義というのが、日本の国益に関わる問題についての判断を国連にゆだねるという事ならば、危険極まりない。日本には、自国の利益の為に国連を使用するという視点が欠けている。国連を神聖化したような議論には心から危惧の念を覚える。」

このような認識が日本人全ての常識にならなければならない。